

CONTENTS

- P1 東京マラソン2025/さっぽろ雪まつり警備<北海道警察>
 P2 第41回 北陸支部激励会/第47回 大阪支部激励会
 P3 第44回 千葉支部激励会
 Member's Lounge 「テレビの舞台裏から見える多様性の時代」
 小西美穂氏

発行所 一般社団法人
機動隊員等を励ます会
〒103-0025 東京都中央区
日本橋茅場町 3-2-10 鉄鋼会館
発行人 中村 真一
TEL 03(5614)0710
FAX 03(5614)0719
http://www.hagemashi.com
jimukyoku@hagemashi.com

令和7年
4月号

はげまし

For the Riot Policemen
& Members

— No.584 —

東京マラソン2025



スタート地点での警備



門前仲町を走るランニングボリス

国内最大規模の大都市マラソン大会を警備
 去る3月2日、18回目の大会となる東京マラソン2025が開催された。国内外のトップランナーや一般ランナー、総勢3万7785人(速報値)が参加。当日は日差しが強く気温が20℃を超える時間帯もあり、冬

の大会ながら、熱中症への注意喚起も行いながらの大会となった。
 警視庁機動隊はテロ対策として事前にコース周辺や駅構内に不審物がないか点検を行い、当日はランナーとともにコースを

走りながら警備を実施するランニングボリスも出動。大規模な交通規制も実施し、無事に警備を完遂した。



ゴール付近での車両通行規制

さっぽろ雪まつり 警備<北海道警察>

北海道警察機動隊が活躍

今年で75回目を迎えた「さっぽろ雪まつり」。大通会場、すすきの会場(ともに札幌市中央区)、つどいむ会場(札幌市東区)の3会場には、あわせて202基の雪像と氷像が展示された。札幌市のみならず、国を代表する観光行事に成長したイベントを、機動隊員等が警備にあたった。

さっぽろ雪まつりは2月4日~11日の8日間行われ、来場者数は約232万7千人となった。
 大通会場では、「札幌へ駆けるサブレッド」の雪像のプロジェクトクションマッピングなどが来場者を魅了。大通会場への来場者数は昨年比0.4%増と大きな賑わいをみせた。
 今回の雪まつり警備は、雄踏警備部隊をはじめ、交通対策、テロ対策部隊等多くの部隊で編成され、期間中の延べ動員数は警察官約2600人、自主警備員約2700人に及んだ。
 道警察機動隊は、警備の主力



航空隊による上空警戒



警察犬による警戒

各部隊員は昼夜の気温差が大きい過酷な環境下で、早朝から各種任務についた。不審者、不審物件に対する警戒・警備や各種事案に対応したほか、外国人を含む多くの観光客への地理教示や、路面凍結による転倒事故を防止するための砂まきを行い、来場者に大きな安心感を与えた。期間中、各会場における大きな事件、事故の発生はなく、任務を完遂した。



車両突入対策

← 今月の賛助広告会員 →

日本製鉄(株)
 日鉄建材(株)
 (株)ワークス
 豊田通商(株)
 堀口海運(株)
 愛知産業(株)
 日鉄物流(株)
 日鉄テックスエンジニア(株)
 明鋼材(株)

北陸・大阪・千葉各支部で 激励会 5年ぶりに開催

コロナ禍などにより中断が続いていた北陸支部、大阪支部、千葉支部の激励会が5年ぶりに開催された。各会場には警察幹部や機動隊員、多くの会員が集まり、親交を深めた。

第41回

北陸支部激励会

1月29日 新潟ランドホテル

災害派遣で奮闘した 隊員に感謝

北陸支部では石川県警察本部警備部機動隊の松村圭中隊長が「災害警備を振り返って」というテーマで講演。能登半島地震発生直後の救出・捜索活動を報告した。その後の激励会は、新潟・富山・石川県警察から約190名の警察幹部・機動隊員等とともに励ます会から幹部・会員等が参集した。

はじめに今井幹太支部長は、「5年ぶりに激励会という直接機動隊員の皆様に会える機会が



講演会の様子



滝澤本部長 鈴木副知事 中村理事長 今井支部長



北川支部顧問 深澤世話人 永本機動隊長

設けられ、これほど嬉しいことはない。機動隊員の皆様は日頃から県内外の自然災害に見舞われた被災地の安心・安全、国際イベントの警備、多様化する犯罪を抑止し、住民の不安解消に努められており、改めて敬意を表する。特に能登半島地震での復旧、支援活動には大きな感謝を申し上げたい。今年4月に大阪・関西万博を控えている。国民からの感謝をさらなる励みに、被災地の支援や大規模警備での活躍を期待したい」と述べた。

当会の中村真一理事長は「当会は、昨年3月に創立50周年を迎え、皆様のご支援、ご協力に對し、心より感謝申し上げます。機動隊の『治安維持の最後の砦』としての役割はいささかも変わ

らない。また、台風、豪雨、震災等の自然災害が激甚化しており、機動隊員の出勤が頻度、規模ともに大きくなっている。こうした大規模警備や災害時の救援、捜索活動に対し、当会として引き続き支援を行っていく」と述べた。

来賓の鈴木康之新潟県副知事は「この会を通じて機動隊員との親交を深め、日常の現場での苦勞を伺いたい」と挨拶された。来賓の滝澤依子新潟県警察本部長は「励ます会会員の皆様にはこれからも機動隊と国民・県民との良き架け橋になっていただきたい」と述べた。

そして、深澤由紀夫世話人(三星金属工業(株)常務取締役)の乾杯の挨拶の後、隊員と会員等による懇親会に移った。

最後に、来場した全員で「この世を花にするために」を斉唱。荒木誠機動隊長が謝辞を述べた後、北川彰人顧問(日本製鉄(株)新潟支店長)による万歳三唱を行い、激励会は盛會裏に終了した。

第47回 大阪支部激励会

2月13日 住友ビルスカイガーデン

万博警備を控える 隊員を激励

大阪支部激励会では、近畿二府四県の機動隊員150名が来場、当会会員も含め総勢約300人が一堂に会した。

激励会の開会にあたり木村純支部長は、機動隊員への感謝を述べ、「今年は大阪・関西万博が約半年間と長期の警備が予定されている。本当にご苦勞様です。平穩な市民の暮らしは昼夜を問わない機動隊員のおかげ」と隊員を激励した。

続いて、中村真一理事長は、「大阪万博では国内外から2800万人の来場が予定され、さまざまな取り組みが必要となる。訓練の成果を十分に発揮し、重責を果たされと確信している」と述べた。

来賓の大原光博近畿管区警察局長は、「警備活動の質量、いづれも以前に比べて次元が変



大原局長 中村理事長 木村支部長



矢ヶ部支社長 岩下本部長



「この世を花にするために」を斉唱

わつてきている。万博開幕を2ヶ月後に控え、会員の皆様をはじめ国民の期待に応えるべく、一層励んでいくと決意を述べた。また、来賓の岩下剛大阪府警察本部長は、「コロナ禍を経て、隊員相互のしつかりとしたコミュニケーションも取れるようになった。集団警備力としての練度もますます上がってきている。私は身近な先輩後輩だけでなく、縦、横、右、左とコミュニケーションを取ることをモットーとしている。今日をその良い機会にしてほしい」と述べた。

続いて全国優秀機動隊員が紹介され、壇上には11名の機動隊員が並び、代表の隊員が謝辞を述べた。

会は矢ヶ部昌嗣氏(日本製鉄(株)参与大阪支社長)が「機動隊の



内田副理事長



会員(上)と隊員(左)のエール交換

安心安全を願う気持ちに心を打たれた」と乾杯の発声をしたのちに懇親へと移った。

最後は全員で「この世を花にするために」を斉唱。内田裕之副理事長の万歳三唱で会は幕を閉じた。

-- 今月の賛助広告会員 --

山陽特殊製鋼(株)
(株)ミック
(株)メタルワン
新ケミカル商事(株)
芝本産業(株)
三和実業(株)

第44回 千葉支部激励会

2月20日 ホテルホートプラザらば

心待ちにしていた 懇親の場

千葉支部激励会では、千葉県警察に所属する第一機動隊、第三機動隊、関東管区機動隊、成田国際空港警備隊の機動隊員が参加。会員と合わせ総勢約230名が集まり、会員と交流した。

最初に壇上にあつた菅千太郎支部長は、「世界中で信じられないような凶悪事件が頻発しているが、機動隊の皆様が拝見すると、高い志がみなぎっているのが感じ取れる。ぜひ頑張ってください」と機動隊員を激励した。

続いて中村真一理事長は、昨年の千葉県での警備事案に触れ、「大変厳しい一年だったが、万全の体制を整え完遂された。心より感謝します」と述べた。

来賓の宮沢忠孝千葉県警察本部長は、激励会への招待に對



宮沢本部長

中村理事長

菅支部長

して感謝を述べ、「5年ぶりの開催で職員一同心待ちにしていた。県警は昨年8月に創立150年を迎えたが、治安情勢はかなり厳しくなっていると認識している。いざという時に県民の期待にしっかりと応えることができる部隊を築いていきたい」と述べた。

続いて、永年功労賞として千葉支部で副支部長を務められた田村哲子氏の受賞が発表され、ご息女に感謝状が贈呈された。そして熊谷俊人千葉県知事からの祝電が紹介されたあと乾杯へ。挨拶に立った野見山裕治氏（日本製鉄㈱副社長執行役員 東日本製鉄所長）は、「機動隊の皆様さんの若々しく逞しい姿に、勇気をいただいた。皆様にエールを送りたい」と述べた。

懇親の時間になると、場内のスクリーンに機動隊の活動の様子が映し出され、隊員の活動が紹介された。また各隊が壇上に上がり、各機動隊長からの挨拶



野見山所長



永年功労賞の表彰



伏見世話人



全国優秀機動隊員



隊歌の披露

とそれぞれの隊歌が披露され、会場は大いに盛り上がった。全国優秀機動隊員表彰では5名の隊員が壇上に上がり、「今回表彰された全国優秀機動隊員として恥じないよう一生懸命頑張る」と述べるなど、一人ずつ力強く挨拶した。

最後に「この世を花にするために」を全員で斉唱し、伏見広世話人（船橋機工㈱専務取締役）の中締めで閉会した。

Member's Lounge

機動隊員等を励ます会 2月の朝食講演会

多様性が社会全体で重視される時代となった。今回は、テレビ局で報道キャスターを経験し、現在はジェンダーを専門分野とし大学で教鞭をとる小西氏に越えたいいただき、テレビ業界の組織改革の事例や、若者とのコミュニケーションについて伺った。

〈2月20日のゲスト〉

こにし みほ
小西美穂氏

関西学院大学 総合政策学部
特別客員教授
元日本テレビ報道キャスター・
解説委員



プロフィール

1969年 兵庫県生まれ

経歴

早稲田大学大学院政治学研究科修士課程修了
(ジャーナリズム修士)

1992年 読売テレビ放送株式会社 入社

1993年 報道局 社会部記者(大阪府警、司法、災害担当)

2001年 NNN ロンドン特派員

2004年 日本テレビ放送網株式会社 出向 政治部記者

2006年 読売テレビ放送株式会社 退職

日本テレビ放送網株式会社 入社

2013年 BS日テレ「深層NEWS」メインキャスター

2017年 政治部解説委員(「news every」キャスター)

2021年 DX取材部専門副部長(デジタル戦略、ジェンダー担当)

2022年 日本テレビ放送網株式会社 退職

現職

著書

「3秒で心をつかみ 10分で信頼させる 聞き方・話し方」
(ディスカヴァー・トゥエンティワン)
「小西美穂の七転び八起き」(日経BP)
「報道キャスターが現場で学んだ42の仕事術」(光文社)

テレビの舞台裏から見える多様性の時代

も深く実感しました。

2. テレビ報道の現場に 求められる多様性

報道局には、社員、派遣社員、学生アルバイトなど、所属する会社も役割も異なる方が大勢働いています。情報を正確かつ迅速に伝えるという報道の使命を、この大人数で果たさなければなりません。そのために、報道フロア内

の座席配置には大きな意味があります。座席配置はBBC(英国放送協会)の報道フロアをモデルにしていますが、中央に12〜15人が座れる大テーブルがあり、その周囲を政治、経済、社会などの各取材部門が放射線状に囲んでいます。例えば、一つの企業の不祥事を取り上げる際、経済部は経営や業績に着目し、法律や業界の規制に関する取材は社会部あるいは政治部が、海外メディアの反応については国際部が担当します。これらの部門が異なった視点で取材するため、情報共有と連携が不可欠です。放射線状の配置によって意図的に部署間の会話が生まれやすい設計になっています。さらに情報を素早く司令塔となる中央に集め、全ての記者はその情報をリア

3 「ミートラック」を回避する

報道の現場は非常に多様な人材が存在する一方で、組織全体として見ると、職位が上がるにつれて多様性が失われていく現実があります。私が在籍していた日本テレビでは、社員全体に占める女性の

(P4つづく)

← 今月の賛助広告会員 →

合同製鐵㈱

日鉄プロセッシング㈱

日鉄ステンレス㈱

日鉄エンジニアリング㈱

玉造㈱

住友商事㈱

「P3からつづく」

割合が2023年は28・5%となっており、役員数になると4・3%です。女性の管理職の割合は15・9%、2030年までに女性管理職30%以上という政府の目標には、まだまだ遠いのが現状です。私自身、取材機会を与えられず悔しい思いをしたことが何度もあります。次第に意思決定層に女性を増やしたいという思いを強くするようになりました。当時私は管理職でしたので、私が関わっている番組から変えていこうと行動を起こしました。

まず見直したのは、前例を踏襲していたルールや慣習の見直しです。それらが本当に必要なのか、効率的なのか、チーム内での見直しを進めました。

すると、私の担当していたニュース解説コーナーの制作チームは、本番後に毎回反省会をしていましたが、必ずしも毎回対面で行う必要はないと判断し、やめました。そして業務終了を午後5時とし、帰宅できるようにしました。同時にチームのあり方そのものも見直し、時短勤務の母親が集まるチームにしました。業務が夜7時からいまで続くこれまでの環境ですと、いくら経験を積んだ優秀なディレクターでも出産すると現場に残れません。事務部門へ異動し、キャリアアップが難しくなる現象が起きていました。これを「ミミートラック」と呼びます。出産を機に責任の軽い業務へと配置され、キャリアアップの機会が減ること、将来への展望がなくなり離職のリスクが高まります。もちろんダイレクトも存在しますが、女性のほうが現場ではより顕著です。まず子育てをしながら働く女性社員や制作会社のスタッフなど10人のチームで持続可能な働き方の実績を作ることを目指しました。

この取り組みで工夫したポイント

トは三つあります。一つは、「困った時はお互い様」をスローガンにしたこと。子育て中の子どもの体調不良など急な休みがどうしても発生しますから、そういう時にカバーし合える環境を作りました。孤立することなく、チーム内にネットワークが形成される大きなメリットがありました。

二つ目は、徹底した仕事の効率化です。リモートワークの活用や、デジタル化を技術部門と連携して一気に進めました。そして三つ目は失敗したらたまたまという柔軟な姿勢です。小さいチームだからこそ試すことができるし、うまくいかなければすぐに撤退し、別の方法を試してみる。この柔軟な姿勢が、持続可能な改善につながっていくことを実感しました。

このチームで制作する番組の放送は夕方4時からで、視聴者は30代から40代の主婦層でした。制作チームが視聴者と共通の課題を持ち、家計や学校、子どものインフルエンザなど、彼女たちの実体験に基づいたリアルな情報がコーナーに反映されることになり、結果として視聴率が向上してきました。するとディレクターからプロデューサーに昇格するメンバーも現れるようになりました。こうした変化が他のメンバーへの良い刺激になり、現場に残りながら出産、子育ても経験してキャリアアップもできるということがチーム全体のモチベーションアップにもつながりました。

4. ジェンダープロジェクトチーム

私は手応えを感じ、新たにジェンダープロジェクトチームを立ち上げました。きっかけは東京オリンピック・パラリンピックの組織委員会、森喜朗さんが「女性がいる会議は長い」と発言をして辞任に至ったことです。

私は大学院でジェンダーを体系的に学んでいたこともあり、後輩

の女性社員から、この問題をもっと知りたい、基礎からもっと学びたいと声をかけられました。そこから社内勉強会を始めようと、自由参加というかたちで有志に加わってもらいました。すると世代も部署もバラバラで、外部の制作会社のスタッフも含め、幅広いメンバーが集まってくれました。

当初は自分たちが日々業務で感じるモヤモヤを「モヤモヤのチャット」内で共有することをスタートさせました。女性が意見を言いづらいつつ、若手の企画が通りにくいといった悩みがチャットで続々と寄せられ、共感が生まれる場ができました。これを職場の問題にとどめず、報道を通じて社会に発信していくという新たな目標が出てきました。すると実際にニュース番組でジェンダーに関わる特集を組む動きが始まり、最初は有志3人で始めましたが、現在は100人規模になっています。

5. 粘土層が阻む組織改革

BBCでは2017年に、

ニュース編集部門で番組内出演者やゲストを男女半々にしようとする目標を掲げました。しかし当初は安全保障や科学の分野は女性の専門家がいないから、半々にするのは程遠い非常に苦労をしたそうです。しかしBBCの編集部門は、本当に人材を探したのかと振り返りました。そして改めて探す女性の専門家はいらつしやうた。結果、非常に面白い新たな人材を見出す好循環につながったそうです。

今ではこの取り組みは単なるジェンダー平等の施策としてではなく、多様な視点を持つことでコンテンツの質が向上し、メディアの信頼性や視聴者の共感を高めることができ、結果的にはビジネスの成功につながっていくと捉えられています。これは26カ国に波及し、日本ではNHKが賛同して

取り組んでいます。

一方、トップが動いても組織が変わらない事例も取材しました。粘土層というキーワードをご存知でしょうか。老舗の総合経済誌である週刊東洋経済が創刊以来、初めて「会社とジェンダー」の特集を組んだ際に、私は編集者にインタビューをしました。すると、トップの意識が高くても、現場にいる40代、50代の中間管理職の反応が驚くほど鈍かったそうです。トップが変革の号令をかけても、この世代が粘土層となり現場への浸透を妨げていました。頭では理解しているも、他人事になってしまっているのです。

粘土層の問題は、組織の変革を阻むだけではなく、若者の意欲を削ぐ要因にもなります。若手社員は会社本気で変わるのかを敏感に見ています。意見を聞いてもらえないと感じた瞬間に成長の場を求めて離れていってしまう。トップは粘土層との摩擦も覚悟して組織を変えていくしかないという話

が非常に印象に残っています。

6. 若者にどう伝えるか

次に、若者に組織内で活躍してもらうためにどうしたらいいのか、若者とのコミュニケーションを考えていきたいと思います。

私は大学で授業をする際に気をつけていることが三つあります。まず一つ目が緩急をつけることです。授業では面白い話も難しい話も、理論的な話もします。難しい話や理論的な話は眠くなりますが、話をしなければなりません。

けれど現場の話は面白いからみんな聞かなくて、そういう話を織り交ぜながら、緩急をつけるのです。大学の授業は今100分ですが、100分の進行表を毎回作りま

うことです。今は便利なツールがあり、スマホを使い、リアルタイムで瞬時にアンケートを取れます。結果はすぐに反映され、回答も匿名でいろいろな意見が出てきます。そういった教材を利用して、授業では必ず1回はリアルタイムアンケートを取ります。

3番目は、スローガンを繰り返すことです。一度言っただけでは行動の変容にはつながりません。授業のテーマは知る喜び、考える喜びだと言っています。これを初回の授業でまず言いますし、今はまだわからなくてもいいと、年間の授業を通して何度も繰り返します。そのうち学生はそのフレーズを覚えるようになります。何かあった時に「これが知る喜びなのか」と思いつくくらいには、繰り返し誘うことが大事だと思っています。

企業にはビジョンやメッセージがあるかと思いますが、やはり繰り返されることによって社員の意識に根付いていくのだと考えています。

講演後質疑応答

Q 若手に、じっくり考えて行動する大切さを伝えるヒントはあるでしょうか。

A 私の20人の演習クラスでは、学生同士で司会をさせて自分の考えを披露する場を設けています。例えば司会を決めて、人の話を最後まで聞くというルールで15分ほど話しあってもらいます。その間、私は何も言いません。すると普段あまり話さない学生や、どういう考え方をしているのかわからなかった学生も、面白い意見を言ったりします。若い人に向き合う中では、話しやすい場を作るということが大事なのかなと思っています。

Q 昨年起きた東京都知事選や兵庫県知事選は、メディア

の予想とは異なる結果が出ました。このことをどう見えていますか？

A 反省も込めて、メディアがアップデートできていなかったことに尽きると思います。SNSで思わぬ人が選挙期間中に躍進していくことがあります。メディアは選挙前に自社の基準で取り上げる人の枠組みを決めると、それ以降、選挙期間中はその枠組みを一切変えません。すると枠組みの外にいた人が躍進しても、その様子を見ていただけという事態になってしまっています。

もう一つ、立花孝志氏に触れておきたいのですが、メディアが彼とどう向き合うのかは大きなテーマです。間違った言説が流れ始めた時に、メディアは選挙期間中に積極的に対処すべきで、一人をファクトチェックするのなら、他の人も全てファクトチェックをしないと、メディアが恣意的な選択をするのかという話になります。選挙とSNSとテレビ報道は、大きな曲がり角に差し掛かっていると考えます。

編集後記

新年度挨拶の書き出しを見ると「うらかな春のおとずれ」や「春の目覚めが心地よく」とあり、気持ちの良い季節です。ただ最近では天候が不順で花粉症の季節でもあり、なかなかそうもいきませんが、わずかでいいから春を楽しみたいものです。(助産士会事務局)

-- 今月の賛助広告会員 --

大阪製鉄(株)
東海鋼材工業(株)
富士興業(株)
日鉄物産(株)
(株)佐藤ホールディングス
五十鈴(株)
日鉄鋼板(株)

(賛助広告募集先)